

平成27年度 第2回亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会 議事録

- 日 時 平成28年1月19日(火) 午後2時00分～3時30分
- 場 所 市民ボランティア活動センター(市民交流センター1階)
- 出席者 麓 和善、高瀬要一、山田 孝、大瀧浩嗣、太田宗一郎、杉浦世志朗、
(委員) 清水幸夫、三ツ松悟、石田泰正、近藤尚登、飯沼政彦、武藤幹二、
(オブザーバー) 松本彩(小川芳範代理)、川口副市長、鈴木副市長
- 事務局 都市整備部公園緑地課、生涯学習部文化振興課、建設部建築課
協力：株式会社文化財保存計画協会

1 議題・協議結果

(1) 歴史的建造物の復元考察について

基本設計業務を受託している株式会社文化財保存計画協会より、歴史的建造物の復元(案)について説明。以下の事項について、委員より意見をいただいた。

2 会議資料

資料1； 建造物の復元考察

資料2； 刈谷城建造物復元基本設計図(案)

3 議事

○本委員会の運営及び本日の進行についての説明

事務局 それでは、定刻となりましたので、平成27年度第2回『亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会』を開会させていただきます。

委員の皆様におかれましては、公私ともお忙しい中、ご出席いただき、誠にありがとうございます。

また、傍聴にお越しの皆様におかれましても、寒い中お越しいただき、誠にありがとうございます。

本日、司会を勤めさせていただきます、公園緑地課長の清水でございます。よろしくお願いいたします。

本日の委員会も、昨年10月に行いました第1回と同様に一般公開にて開催し、市民の皆さんに刈谷城の復元に対する、ご理解を深めていただくとともに、透明性の高い検討をしてまいりたいと考えており

ますので、よろしくお願いいたします。

本日の出席ですが、委員 12 名の皆様には全員ご出席いただいております。愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室よりオブザーバーでご参加いただいております小川様は本日所用のためご欠席となっておりますが、代理として、松本様にご出席いただいておりますので、よろしくお願いたします。

それでは、開会にあたり、委員長の麓和善様よりごあいさつをお願いいたします。

○委員長あいさつ

委員長 城跡の整備と言うのはあの、史実忠実に復元しようと思うと、非常に大変で解決しないといけないことがたくさん出てきます。昨年の 10 月に開催された委員会で、また新たな検討すべき課題等が出てまいりまして、一つずつ成果や事実を駆使しながら、かつてどうだったかというのをより明らかにしていくわけですけれども、今回も、非常によく検討された資料が出ていると思うので、この内容について皆さんにご審議頂ければと思います。どうぞよろしくお願致します。

○情報公開及び傍聴に関する確認

事務局 ありがとうございます。

議題に入ります前に、本委員会の運営及び本日の進行について、ご説明いたします。

事務局 本委員会は「亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会設置要領」に基づいて、市が実施している刈谷城の整備内容について、ご意見をいただくものとなっております。今年度につきましては、基本設計の内容を中心に、ご意見等を賜りたいと存じますので、よろしくお願いたします。

委員会につきましては、本年度 3 回の開催を予定しており、今回が 2 回目となります。お手元次第の裏面に、今年度のスケジュールについて記載したものを、用意させていただきましたので、ご確認下さい。

本委員会ではありますが、先ほど申しましたように、一般公開にて実施してまいります。

また、委員会の内容につきましては、市ホームページ、市民だよりなどにて公開していく予定でありますので、ご臨席の皆様につきましては、ご了承いただきますようお願い申し上げます。

現在、第1回委員会の内容を市ホームページで公開しておりますので、よろしく願いいたします。

続きまして、本日傍聴にお越しいただきました皆様にご案内申し上げます。

本委員会につきましては、配布資料にもございます傍聴に関する注意事項をお守りいただきますようお願い申し上げます。

お守りいただけない場合は、ご退場いただく場合もございますので、予めご了承いただきますようお願い申し上げます。

本日お渡ししている資料につきましては、個人所有の貴重な絵図等も記載しており、所有権等の理由からお持ち帰りいただけませんので、お帰りの際に受付にてお返しいただきますようお願いいたします。

またアンケート用紙もお配りいたしておりますので、お帰りの際にご協力をお願いいたします。

○配布資料の確認

事務局 それでは、本日の配布資料について、確認をさせていただきます。

委員の皆様には、会議の次第・委員会スケジュール、資料1「建造物の復元考察」、資料2「刈谷城建造物復元基本設計図（案）」となります。

不足している資料がございましたら、お知らせください。

会の進行は主にお手元の資料にて行いますが、絵図、図面などはプロジェクターによる表示も行いますので、質疑の際にご活用いただければ幸いです。

また、傍聴の皆様には、本日の資料として、資料1、資料2、参考資料として第1回の資料もあわせてお渡しさせていただきますので、ご確認下さい。

それでは、これより会の進行を委員長にお願いしたいと思っておりますので、

よろしくお願ひいたします。

(1) 歴史的建造物の復元考察について

委員長 それでは議事に従って、進めていきたいと思ひます。まず議題 1「歴史的建造物の復元考察について」事務局から説明をお願ひいたします。

事務局 それでは説明をさせていただきます。昨年 10 月に石垣について説明をさせていただきました。今回は、その上にある建造物の考察ということで、説明をさせていただきます。

復元年代は、前回の石垣の考察の資料を基準とし、江戸初期としました。絵図資料、出所や年代のはっきりしている絵図資料を重点に検討を行いました。それから、石垣の勾配などを類例に基づき、遺構を中心にしたうえでの石垣の復元案を提示してまいりました。会場入口に石垣の復元模型を展示しております。辰巳櫓の石垣につきましては約 7.6m の高石垣になります。裏門付近で約 2.6～5.6m ほどの高石垣になります。江戸初期の徳川系の石垣としては、非常にまあ珍しいのではないかというふうに思ひます。

今回は建造物の考察という事で説明をさせていただきます。考察の前に、建物の仮の名称を設定させていただきました。中心にあるのが、東南隅櫓でして、この方向から、辰巳櫓というふうに仮に名称を決めさせていただきました。それから表門、裏門があり、これに連続するように多門櫓が連続して建ちます。多門櫓ですが、規模が梁間二間で続きますが、方位と間数から、仮の名称をつけさせていただきます。それから、表門側の端に土塀がございますが、これも仮の名称として東土塀、南土塀とさせていただきました。

それでは、建造物の復元考察につきましてご説明いたします(資料 1 : 2 ページ参照)。復元根拠資料の整理ですが、まず基本となる発掘遺構があり、石垣の復元の考え方と同じく、発掘調査結果を最優先して進めてまいります。今回、建造物に対する遺構は表門と、裏門の礎石跡しか出ておりません。それ以外はほとんど石垣遺構であります。発掘調査結果の次に絵図資料を参考にしております。これも石垣の復元検討と同じように絵図を使って考察をしてございます。続いて、文献史料にも建物寸法を示す記述もいくつか見られますので、参考にしてございます。最後

に、これらの検討でも形姿が見出せない場合につきましては類例建物を比較検討し、見出すという形で進めました。

こちらの平面図は発掘調査結果の平面ですが、この部分が表門、この部分が裏門の礎石跡になります。表門では4箇所とそれに平行して2箇所ほどの礎石跡が見つかっております。表門の東側には雨落溝が5尺ほど離れた所に確認をされております。これも建物を復元する上では非常に重要な要素になっております。裏門も同じような範囲で礎石跡が確認されております。それから建物の遺物ですが、瓦が多数出ておまして慶長期及び水野家の家紋の瓦も確認をされておりますので、今後復元するにあたってはこのあたりを参考に復元をするということになります。

次（資料1：3ページ）にこれは復元するにあたって重点的に見た絵図資料の一覧でございます。建造物の復元は、bの刈谷城図を基本に検討しています。平面的な情報は遺構からでてきますが、立面的な情報としては、この絵図しかございませんので、これをベースにして展開していきました。それでもまだ分かりづらいような場合には、aの正保城絵図や他の絵図資料、ある程度年代、出所が判明している絵図資料を基に考察を進めてまいりました。

続いて（資料1：4ページ）文献史料の検証です。②は庄屋留帳にある刈谷城の払い下げ時の記録であり、この中に表門、裏門の払い下げ時の規模が書かれております。ここで注意していただきたいのは、表門でありながら、規模は小さいのですが、払い下げの金額が高いというところは非常に重要なポイントになるのではないかとというふうに考えております。③は宝永地震後に当時の藩主の三浦家から出ている刈谷城の修復願いの絵図に書かれている文章の読み下し文です。また後ほど詳しくご説明いたしますが、ここに三階の隅櫓と書かれております。これは南東隅櫓の階数を示しているというふうにみております。これを基に三階建てといたしました。それから、土塀の高さが7尺というふうに書かれておりますが、これにつきましては軒先の高さという形で設定をして土塀の高さに当てはめております。

最終的にそれでもまだ不明な所がある場合は類例建物から検討をいたしました（資料1：5ページ）。類例建物についても、採用方法に優先順位をとり、まず水野家の変遷の経歴、血縁関係から関連性がある城郭建築を

優先しました。例えば福山城でありますとか、大和郡山城あたりが、対象になる城郭と思います。次に同時代、同規模の類似性、それから意匠上の共通点がある城郭建築を参考にいたしました。最後に、それ以外の城郭建築で類似性があるもので検討を進めてまいりました。

こちらの写真は、愛媛県の大洲城の高欄櫓でございます、規模は桁行・梁間とも三間で、高さは異なりますが、概ねこれぐらいの三間の規模になります。その右側の写真ですが、名古屋城の西南隅櫓です。二重三階建ての櫓です。二重三階建ての櫓というのは名古屋城以外では、ほとんど残っておりません。類例としてはこの西南隅櫓ともう一棟（東南隅櫓）ぐらいでしかありません。

これらのような内容を基準としながら各々の建物の考察を進めてまいりました。まず、遺構が残っている表門から説明させていただきます（資料1：5ページ）。先程全体の平面図の中で表門の遺構を示しましたが、その拡大したものがこれでございます。礎石跡が4箇所、こちらに平行に2箇所、確認をされておまして、この礎石間が6尺5寸、それからこれが雨落溝というふうに確認をされておまして、ここの筋から5尺ほどの位置にあります。それから、こちらの礎石間の距離ですけれども5尺、5尺という形で確認をされました。このような形が礎石になります。表門の構成ですが、正面側で入り口に鏡柱という大きい柱がありまして、ここに大戸がつくパターンが表門の主な構成になります。その横に袖柱という柱があり、脇戸がくるといった構成になろうかと思われま。概ね城郭の場合の表門はこのような形で、袖柱が両サイドにつく場合とつかない場合など、いろいろなパターンもあります。刈谷城の場合、石垣の復元幅からここが約三間弱ぐらいの幅になりました。この柱の位置を設定することから今回の刈谷城の表門復元考察を始めております。

では（資料1：6ページ）、この鏡柱の位置をどういった考えのもとに配置を決めたかといいますと、石垣の復元幅で両サイドの間口が分かりました。この間口に対して鏡柱の柱間がどのくらいかというのを、他の類例から参考にして導き出すことにいたしまして、そのまとめたのがこの表でございます。この表から、この間口に対してこの梁間ということが大体出てきまして、その平均をしたところで今回の刈谷城の表門の鏡

柱の柱間寸法を決めました。この柱間寸法を決めた後に、袖柱があることが絵図に載っていますので、その設定を仮に行い、この鏡柱の柱間に対してこの袖柱の柱間といった比率を、類例建物から導き出し、この柱間を決めました。また鏡柱の材の大きさ、見附の幅と、奥行きの厚みの大きさはどのくらいかということについては、この柱間に対してこの見附の正面側の幅はどのくらいかということも、類例建物から比率を割り出しました。それが1尺8寸という幅になりまして、奥行きはこの幅に対して比率を出し求めました。同じ方法で、袖柱も寸法を導きだしております。

では(資料1:7ページ)、この正面の門の位置はどこなのかということですが、復元で石垣のラインがでてまいりました。そうすると、基本的に、この柱の上に冠木という大きな横材が渡るわけですがけれども、その冠木が石垣より外に出ない範囲で設定をいたしました。そうするとこの距離がここから4尺ほどの距離であると冠木が出ずにこの間におさまってくるということになりました。こちらの多門櫓が二間で伸びてきて、同じ梁間で、この表門の上にもものだろうというふうの設定をしていますので、東側の柱筋をここの台としましてここから二間、こちらに渡しております。そうするとこれが、櫓を支える柱の礎石になるということがお分かりになるかと思います。で、これが表門の控えの柱の礎石だということになりまして、それ以外の柱の礎石は今回の発掘では確認をされておきませんので、先程考察した鏡柱、袖柱の位置、大きさの下には、同じように礎石がこの下にあったのだろうというふうに見ております。それから、ここから5尺の所に雨落溝が発見をされましたので、同じ位置に雨落ちをいれております。で、そうすると排水として下のほうに抜けるように計画をされたのだろうというふうな推定をされますので、柱と柱の間を通して下に抜かしたのではないかというふうに想定しています。このような形で平面形の位置が決まりました。それから絵図による形式の検討ですが、立体的な姿の拠り所とするところはこの刈谷城図の絵でしかございません。これから屋根は瓦であろう、白っぽく書かれているところは漆喰壁であろう、それから壁には横長の窓が3箇所描かれている、その下に、上の屋根と同じように書かれているので庇の部分についても瓦ではなかったかというふうな思っております。ま

た別の絵図のほうでも確認をいたしまして、同じように屋根が瓦で、庇も瓦であろうということが分かります。こちらの絵図では表門三間というふうに書かれておりますが、復元した石垣幅が、大体三間ぐらいになりますので、そうすると表門三間というのは、刈谷城ではこの石垣の幅だというところで設定をしてございます。

続いて二階平面（資料1：8ページ）になりますが、当然ながら絵図のほうにも多門櫓が連続した形でとりついております。南から二間の多門櫓がそのまま表門の上にも連続していく形で設定をしますとこのような形になります。このところに石垣がきまして、こちらの柱筋が石垣にのらない、こちらから土台を跳ねだしてその上に柱がのるという状態になります。こちらのほうにつきましては、一部石垣の上ののりますけれども、それ以外のところは先程の柱でいけた加工の構造になるということになります。それから平面形については、立面図で窓が3箇所書かれておりましたけれども、間隔をあけて3箇所ということで柱割りからすると概ねこの程度で3箇所になるというふうに思っております。その跳ねだした部分の石垣との間が大体2尺5寸弱ありますので、その間につきましては、これも類例を参考にして、この部分の床に石落としを設けてございます。それからこちらが裏のほうになりますが、表よりも裏のほうに窓の箇所数が少なくなっている場合が非常に多いということもあわせて、表門の裏側につきましては開口部を2箇所に設定をしてございます。こちらは水野勝成が築城した福山城の明治初期まで残っていた時の古写真になります。立面的なところで窓の仕様とかを参考にしています。黒っぽく写っているところは、格子も塗込めずにそのまま、木をそのままにしているところなのかなというふうに思っております。まあ部分的にも漆喰塗込めて白くなっているところもございしますが、こういったところの開口につきましてはこの福山城の古写真も参考にしながら意匠を検討しております。

続いて（資料1：9ページ）これはどういう表かといいますと、現存する城郭の中で、二階の窓がどういうパターンがあるか、というものをまとめたものです。正面側、裏側に入れ方として連続して窓があるもの、中央に連続があつて両サイドに窓があるもの、連続せずに個別に入っているもの、いろいろなパターンがございします。刈谷城の場合は、絵図か

らみるとCのパターンになるわけですが、裏の窓がどうかといったところでこの表を参考にしながら、同じパターンで2箇所という形で決めています。こちらの写真は福山城の筋金御門という伏見城から移築をされたものというふうに言われている門なのですが、こちらの門につきましては、連続した塗込めの無い窓で、格子窓になっております。裏側を見ても、何も無い櫓になっています。刈谷城の復元案では絵図を優先しましたので、3箇所の窓があるという形の意匠にさせていただきます。

次に（資料1：10ページ）基準寸法の床高でありますとか、小屋組を同じような方法で考察をしています。先程お話しいたしました、二階の櫓の部分については、完全に石垣が乗らずに跳ねだした土台の上に、柱が建つところもでできます。石垣面から跳ねだした土台の面まで約2尺ちょっとくらいになるかと思うのですが、福山城の再建された月見櫓のように石垣に頼杖を設けて受けているといった構造もありますので、場合によっては刈谷城もこのような形で、頼杖を作った上で跳ねだして設けるということを考えております。構造ですけれども、これも類例からは腕木があるものと腕木がないものもでございます。刈谷城につきましては、腕木を設けて梁を架けた伝統的な方法であります折置組の小屋組ということにしております。この勾配も同じように類例から平均を出しまして、屋根勾配を設定しています。軒の出も同じような形で平均を出しまして、寸法を決定しています。先程の平面を断面にすると、このような断面になりまして、正面側に瓦葺の庇、そして裏側にも庇がある形になり、5尺離れたところに雨落溝がありまして、ここの雨だれがここに落ちるといふふうになると思われまして、これが冠木なのですが、その上に床梁を跳ねだしまして、裏のほうにも、出桁を設けて庇の垂木を受けています。こちらのほうにも、土居桁が冠木よりも外側にできることとなりますけれども、この部分に石落しを設けるようにしております。瓦の根拠といたしましては、こちらは福山城の天守に入るところの庇の古写真ですが、本瓦で瓦葺になっているということがわかります。刈谷城もこれを参考に瓦葺の庇としております。それから意匠上また正面側でするので非常に目立つところになります大戸ですが、これも2枚の開きになるわけですが、刈谷城の意匠につきましては、福山城の筋金門の横羽目板に倣い、その表面に帯鉄を入れた表門という形で考えています。

右下の写真は現存する高知城追手門です。これは時代的には少しの後の門になりますが、非常に参考になる形でここに挙げさせてもらいました。背面の写真を見ますと、石垣がありまして、この前にこの櫓をうける柱が建っています。高知城の場合は1列ですが、刈谷城の場合は、ここが2列になって櫓をうけるという形になるというふうに思っております。

(資料1：11ページ) 櫓に続く多門櫓、表門、裏門、多門櫓の主要寸法を出すにあたっての比較表をまとめたものです。屋根勾配、軒高、軒の出、腕木の有無、柱間寸法、垂木の枝割りとは、一間に何等分された垂木が配置されているか、といったことも重要でしたので、同時代・同規模の多門櫓を比較して平均値を出し、決定したものがこの表になります。

(資料1：12ページ) 同じような考察で、裏門も展開していきました。裏門も6箇所の礎石跡が確認されております。この上に櫓がのるわけですが、それを受ける柱の礎石の跡だろうと想定をしております。それでこれが表側の柱筋の礎石跡だろうと思っておりますし、この部分は少し溝状ですけれど、雨落ちではなくて、遺構面に段差があるということの見解ですので、このあたりで階段等の段差解消のものがあつたんだろうと考えております。

(資料1：13ページ) こちらが絵図に見る形式ですけれども、表門と同じような描かれ方になっております。ただ裏門のほうにつきましては、左側の絵図では庇が書いてございません。しかし、右側の絵図は、払い下げ時ぐらいのときに残っていたと思われる裏門・多門櫓と思われませんが、正面側に瓦葺であろう庇が描かれておりまして、この隅のほうに斜めに入る線みたいなものがあります。これは先程の頬杖を表しているのではないのかなと見ております。基本的には裏門も同じように正面側に瓦葺の庇があつたのではないかと思います。窓も2箇所ありますので、復元案でも窓を2箇所設定しています。この裏門も同じように鏡柱の柱筋の柱の位置が分かりませんし、大きさも分かりませんので、その位置、大きさ等につきましては、表門と同じ方法で決めています。復元する石垣はこのラインとこのラインになりますので、このラインからこの柱の上に乗る冠木材がでっばらない中で、配置するということにな

ります。

(資料1 : 14 ページ) それでは次は辰巳櫓についての説明をいたします。復元されれば刈谷のシンボリックな建物になるのではないかと考えております。遺構から石垣を復元して建ちあげますと、ここからここまでが約7.6mの高さになります。で、それで両サイドから建ちあげて、形状を決めますとこの大きさが東西で約21.5尺、約6.5m、それから南北で約21.2尺、6.4mの規模の櫓台の石垣になりました。その中で櫓をのせ、石垣の基準寸法を、一間を6尺5寸ということにしましたので、建物のほうも同じように一間を6尺5寸という形で設定をしますと、この石垣の櫓台の上の規模として、桁行三間、梁間三間という規模の櫓になることが分かります。その石垣よりも面に漆喰、今回は板壁ですけれども、その内側に建物がくるということですので、十分にこの三間三間四方の櫓がのるということになります。で、それでこの櫓台に合わせて設けますと、この部分に柱がくる想定がされるのですが、多門櫓の取り付けとして、非常に中途半端な位置に柱がくることになります。柱位置が壁についたところでもありますので、この部分につきましては多門櫓からの動線も考慮して、この柱を抜いて大きな梁を架けて、この上に二階から上をあげるという形で平面形にしました。それから両側の多門櫓を取り付きますので、この入り口につきましては、大戸の括り戸付きという形で設定をしています。この例も姫路城等で、多門櫓の間仕切りに大戸がありまして、中に括り戸があるという例がございますので、櫓と多門櫓の結界ということで、壁とそういう柱間装置で、結界を括るという形にしてございます。ここは石垣の隅になりますが、このところにつきましては、表門も裏門も正面側に飛び出したところに石垣を設けましたので、同じ考え方として、出隅の部分も石落としをはみ出して設けるという形で設定をしています。階段も、その床梁等のかける方向によって決まる部分が多いのですが、刈谷城では、こちらのほうからあげるという形で設定をしています。次に、立面的な根拠ですけれども、これも絵図資料の絵しかございません。一番参考にしているb. 刈谷城図では、上が入母屋造りで、下も瓦葺、千鳥破風を持っています。ここが、一重目になるのですが、下のほうにつきましては、板張の壁になっておりまして、その上が白く塗ってありますので、これは漆喰壁だろうと思

われます。その間に2箇所の窓が開けられています。それから上のほうにつきましては、両面1箇所ずつの窓が開けられています。多門櫓の屋根がこの二重の屋根の下に入り込んでいます。これも、これから多門櫓の高さを決めるにあたって、非常に重要な要素になるわけですが、こういった意匠の形態をしていることがこの絵図から読み取れることができます。同じようにa.正保城絵図ではどうかというと、上の屋根の向きがちよっと違いますが、大体同じような描き方で書かれております。こういった形で、当時としても同じような仕様であったのだらうと思いますし、この描かれ方としても一重と二重で、約2倍強ぐらいの高さ関係があります。こちらと同じように下のほうが少し高く描かれております。こちらの正保城絵図も、下の屋根の下に入り込んで、これは両絵図とも同じような関係になっているということが読み取れます。それから、辰巳櫓の階数ですが、絵図から見ると二重のように見えますが、この中にもう一層あって、階数としては三階になっているというふうに見ております。その根拠として、享保17年に当時刈谷藩主の三浦家より幕府に出されたと言われる修復願いの中に、櫓の階数が三階を書かれているというところから根拠にしております。

(資料1：15ページ) それから、類例にみる平面規模と構造形式ですけれども、現存する櫓の中で、三間三間、二重三階建ての櫓はありません。二重三階で現存するのは六間七間の名古屋城の西南隅櫓と東南隅櫓のみでございます。こちらは規模が違いますので、それをそのまま高さ関係に当てはめるとプロポーション的にも、違う感じになります。下の階と上の階で、桁行、梁間を少し短くしているのですが、西南隅櫓の下の階から上の階への逡減率(少し狭まった率)を桁行と梁間で出しております。西南隅櫓では桁行で0.71、梁間で0.67の逡減率で狭くしていますので、刈谷城につきましても、上の階については、この0.67の逡減率という形で三階の平面形を決定しています。一階から三階まで階段が取りつくわけですけれども、こういった真っ直ぐな階段の上り口のところには、摺戸がついて、閉めるような装置がついたのではないかと想定をしております。階段の上がる位置には、手摺は、高さが約2尺になるかと思うのですが、こういった形で、手摺がまわされていたのではないかと考えております。

辰巳櫓の構造形式ですけれども、床組と床高ですが、床高につきましては基本的には表門のところで高さ関係から石垣から1尺5寸の高さになりました。辰巳櫓も含めてすべての多門櫓の床の高さが合うように設定をしましたので、辰巳櫓の部分につきましても石垣の天端から1尺5寸、45センチの高さの床高というふうに設定をいたしました。軸のほうにつきましては、基本的には一階か二階までの通し柱のある層塔型の櫓という形で考えております。それから、屋根も入母屋の瓦葺という形で、外装については、絵図を参照し、上の階は漆喰、下の階は、上部が漆喰で下部が下見板張という形で考えております。

(資料1：16ページ) それを基に作図したのはこちらの図でございます。ご説明の前に、一階平面図の絵が方位と重なっております。柱等ではありません。こちらが一階の平面形になります。こことここに壁を設けまして、こちらとこちらに一間の大片引き戸がありまして、この間に括り戸を設けるといってございまして、二階は三間三間の四方の平面形になります。名古屋城の西南隅櫓のように六間七間になりますと側柱の内側に、柱がくるのですけれども、刈谷城は三間三間の規模が小さいものですから、側柱だけの柱という形で設定をしています。それから三階ですが、三階の規模として先程の逡減率をもって桁行、梁間とも0.67を掛けたこの基準尺にしてございまして。そうすると、桁行で13尺、梁行で13尺、中央に一間6尺5寸とり、残りを2等分間隔という形の平面形にしました。基本的に高さ関係につきましては、名古屋城の西南隅櫓の一階から三階までの階高、弘前城、これは四間四間で少し大きいのですが、三階櫓がございまして、その一階から三階までの階高の平均値をとり、規模として似ている弘前城の辰巳櫓の二階の階高をとって、残りを一階の階高にしています。そうすると断面がこういう形になるわけですが、この屋根の下に櫓の屋根が入ってくるという形になります。(資料1：16ページ) こちらが階高を参考にした名古屋城の西南隅櫓の平面図でございます。一階、二階、三階で一階二階は同じような平面形で三階を逡減した平面になっています。外観からは二層として見えます。この間にもう1枚床が入ってくるという形の断面、立面になります。右側は弘前城二の丸辰巳櫓です。四間四間という少し規模が大きいのですが、刈谷城の三間三間と似たような規模でありますので、高さ関係の

参考にしています。

(資料1：18ページ) こちらは、辰巳櫓の類例建物の比較表です。時代性、規模などから全国の城郭を比較いたしまして、天井の有無や窓の構成などを一覧にしたものでございます。これらを参考にしながら、刈谷城の仕様も決めています。

(資料1：19ページ) それから多門櫓になります。これが復元した石垣のライン、大きさになります。ここが4.5mの石垣の幅になります。同じ二間といえども、こちらの幅は3.9mぐらいいと狭い石垣の幅になりますが、ここに多門櫓が連続してのるという形になります。ここからここまで約52mの距離になります。絵図で見ますとこちらのように描かれておりまして、屋根は瓦であります。壁は石垣からすぐ白っぽく塗り描かれておりますので、漆喰であることが想定されます。壁面には横長の窓が描かれております。基本的に多門櫓の窓の数もこの数に合わせたところで設定をしています。全体としてこのような形になりますが、こちらに土塀がこういう形でくっつくという形になっていきます。多門櫓の入り口としては、ここに両サイドの寄合の石階段、ここに真っ直ぐ上がる石階段がありますので、ここが入り口になるということになります。この入り口につきましては、一間の大戸の片引きという形で類例として福山城の伏見櫓の引き戸や姫路城の大戸の引き戸などが参考にできると思っております。

(資料1：20ページ) 絵図に描かれた多門櫓の窓は、外側は分かるのですが、内側の窓の位置をどうするかということが次の課題になると思います。類例としては、外側にあるか、全く無いか、あるいは内側の数を少なくしているパターンが多いです。全く無いのは熊本城宇土櫓の続櫓なんかは内側にはないのですが、姫路城では内側に数が少なく、外側に窓があります。刈谷城の場合も、正面側につきましては絵図を尊重し、同じ箇所数に設定しますが、内側につきましては、数を減らして箇所数を設定しています。そういった中で窓の構成ですが、これも先程の表の中で、内側から障子、板戸、格子など様々なパターンがあります。絵図では格子状に縦線が書いてありますので、格子だったんだろうと思われれます。内側も、どの城郭も土戸、正面が漆喰戸で裏側が板戸になっているのですが、そういったものがあつたんだろうと思われれます。もう

1つはその内側にも障子等もある例もございますので、刈谷城の場合は同じように、土戸の内側に障子を設けるという形にしています。それから連動する多門櫓にも、銃眼等の狭間があげられている城郭が結構あります。刈谷城は、絵図には描かれておりません。土塀は銃眼及び矢狭間らしいものが描かれています。a. 正保城絵図及びb. 刈谷城図にはこういった狭間が入っておりませんので、これも刈谷城の特徴のひとつであるということで狭間を設けない仕様になっています。

(資料1：21ページ) これは多門櫓の断面図です。基本的には、これが連続しています。この二間幅が、部分的には一間半の幅もありますが、基本的な構造としてはこういった多門櫓が連続していくと考えております。土台をして、その上に柱を立てて、腕木でその上に梁を架けて桁を置く、まあこういった折置の多門櫓になるということになります。勾配も、類例から平均値の6寸という数字を見出しております。類例として、彦根城の櫓の内部や宇土櫓の続櫓の内部などの構造になると思いますので、このあたりを参考にしたいと思っております。

(資料1：22ページ) 最後になりますが、土塀です。先程の多門櫓に、矩折で土塀が取りつく形になると思いますが、絵図の中でもぐると土塀でまわしていることが分かります。土塀には後ろに控えがあるものと、独立式のものがございます。刈谷城は土塁上にも控えの構成を見出してないということですので、復元案では控え柱のない土塀としています。また屋根については、絵図にも瓦で描かれていますので、姫路城の類例を参考にしながら、出桁形式の屋根と考えております。文献史料にも高さ7尺というふうにありましたので、ここの高さを、GLから7尺にして高さを設定してございます。壁には鉄砲狭間等を入れる形で構成を考えております。以上で建造物の考察の説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

委員長 ありがとうございました。それでは、今の説明に対しまして、ご質問・ご意見等ありましたらよろしく願いいたします。

委員 よろしいですか。

委員長 お願いします。

委員 資料1の1ページ目の図ですが、多門櫓の北三間の櫓とあると思いますが、3ページのa. 正保城絵図では、よく見ると確認はできるのですが、

b. 刈谷城図ですね、最も参考にされているというほうは、北三間の櫓はなく、土塀がぶつかるように描かれていると思います。2ページの発掘調査結果をみると、ここのあたりなのだろうかと思いますが、こちらに痕跡が特になさそうですが、こちらに櫓があったかどうかということに関しては、どういった考えから推定されたのでしょうか。

事務局　こちらのほうですが、刈谷城図ではそういうふうに書かれておりますが、若干折れ曲がったところにもそれらしいものがありそうだという形でしていますので、その梁間の中で折れ曲がって、土墨のほうに折れ曲がっているというところで、石垣を設定しているところがございます。

事務局　発掘遺構の所見からはですね、北三間櫓の所の手前で地固め遺構の深さが浅く変わってしまって、ここで折れ曲がって北三間櫓のように曲がっていくような形で見つかればよかったですけど、ここで深さが変わってみえてしまうので、どれに向かって櫓が伸びていったかどうかは、遺構からではちょっと分かってはいません。

委員　それではまた確認をしていただいて、作るか作らないかを決めていただければと思います。

委員長　私も確認したいのですが、要するに、ここでここを終わってもいいわけですね。ここで終わってそうするとここにあの塀が取りつく形でもいいんですね。そうなるか、少しこう多門櫓が折れ曲がるか。

事務局　絵図のほうが確かにそうなっておりますので、検討させていただきたいと思います。

副委員長　苦勞されて、復元案をまとめられたという感じがいたしましたけれども、例えば表門にしても、7ページの復元図で、本来、柱が建っていたところで、今回その痕跡が検出できていない礎石跡というのがいくつかあると思うのですが、それがうまく合理的に説明できるのか、地面がもう削られてしまっていて、痕跡をおさえることができなかつたとか、復元はしているけども、痕跡が確認できなかつたところについての合理的な説明が、裏門のほうも同じだと思うのですが、うまくできるのかというのが、一点あります。

それから、7ページの表門の復元図でいうと、鏡柱の後ろに柱を建てていないですが、これだと扉の前をどうするのか。この7ページの図の鏡柱が南北に2本立っていますが、南のほうは控えの柱が建つんで

すけども、北側の柱の後ろに柱がないですね。これだと扉を受けるものが何かないと、安定しない。そうすると、ここの鏡柱の後ろとその梁を架けるところからいうと、④の柱の南側にも本来柱が建たないと、門としては安定した構造にならないのではないかなと思います。そうすると、そこにも柱の痕跡がでてこないといけなところなのですが、そこも出てこない。というその辺のところ、うまく説明がつけばいいのですが、なにかないでしょうか。

事務局 発掘調査で出てきました、根石の地固めのような遺構ですけども、本来のその現状の地表面から、かなり浅い部分で出てきております。そういったところで以前に、造園としてなんらかの施工・作事をした際に、礎石は元々なかったとは思いますが、かなり薄く残っている状況です。ですので、その礎石の地固めそのものが、元々の築城の際に、整備されたところについては、今回の発掘調査の遺構のように、礎石の跡として残ってはきてはいるのですが、造園として深く整備されてあったところについては、おそらく削り取られて、なくなってしまったのではないかなというふうに考えております。

委員長 今の話ですが、この辺りの確認できないところが、ここの地業の高さよりも深い部分、この確認できたところよりも深い部分まで削り取られたので分からない、というようなことが言えれば、それは合理的な説明がつくのですけれども、こっちよりこっちのほうが高く、無いというのはおかしいのではないかということです。だからそれを、単に無いというだけではなくて、ここよりも下まで削り取られているので確認できない、と言えればいいと思います。ですから確認できないのが、あったけどそれがなくなった、あった可能性はあるけれど、今となっては確認できないということが合理的に説明できればいいということです。あと、ここに柱がないと扉が開いた時という話は、10ページの福山城では柱の無い例がありますので、必ずしもこれは無いといって無いものではないかなと思います。

事務局 鏡柱の部分ではなくて袖柱の筋に、柱があるケースは、いくつかの類例が確かあると思います。

委員長 私も疑問に思っていたところを、質問させていただきます。まず、仮の名称をつけられるのはいいのですが、仮の名称をつける前に、絵図で

あるとか、文献史料で、それぞれの部門がどう呼ばれているのか。それは、一回はつきりさせて、呼ばれているものについては、なるべくその名称を踏襲したほうがいいと思います。その場合に、ここがずっと多門櫓が繋がっていくという解釈で、表門の二階とか裏門の二階のところも間数で表した櫓としていますが、ここはやはり一つの表門としての櫓門、裏門としての櫓門というのがあって、多門櫓とは別にしたほうがいいかなというような気がします。そして間数で呼んでいるのですが、この辺の北の何間というのというのが、ただ名称だけを見ると、どこのことを指しているのか、なかなか分かりにくいですから、もう少し、うまい名前を検討してもらったらいかなと思います。それとやはり多門櫓は櫓としないで、多門櫓と呼んだ方がいいと思うのですが、まあそういうところもう少し、名称については検討していただきたいと思います。

それと、8ページの復元平面図、表門の復元平面図ですが、この二階の部分。ここに庇の屋根がずっときていますよね。石垣のところまで庇の屋根がきてこの庇を受けるのに、頬杖をつけるかどうかというようなこともあるかと思うのですが、ここまで伸びるべきものなのか、石垣に当たったところで、つまり石とかのほとんど雨落ちを気にしないところには、庇が無くてもいいのかなってというような気もします。そうすると今度は、7ページの平面図で、ここから6尺5寸とあるここがちょうど棟の中央になって、さらにここに6尺5寸いったところに表の櫓門の二階部分があって、ここは2尺、この梁がそのまま持ち出して、支えるわけですよね。そうすると、こちらも、こちら側からきた土台が2尺分、そのまま跳ねだしたら、石垣から頬杖で支えなくてもいけるのかなと。つまり、ここと条件がほぼ同じですからそういうふうにして、頬杖が必ずしもなくてもいいのかなというような気はしました。それと、13ページの裏門のこの部分も、同じように思いました。

それとですね、14ページでここに、辰巳櫓と呼んでる櫓から多門櫓にゆきでる柱がありますが、この柱の位置が果たしてここでいいのかなと、これはなかなかどこかというのは分かりにくいのですが、この6尺5寸の括り戸の上に、ちゃんと柱を乗せて、このところはこの奥じゃなくて、この角のところに向かって多少ふれても、この間に、扉があってもいいかなというような気がしました。

あとは、資料の作り方でちょっとしたことですが、17ページです。名古屋城の西南隅櫓と弘前城の櫓。いずれもこの寸法がミリですよ。その前の16ページの刈谷城の場合は尺で書かれています。この両方の規模を比較しようとした時に、比較できないので、尺でいくなら尺で、統一してもらったほうが、規模を検討するのにいいのかなという気がしました。以上です。

事務局 すいません。先ほどの副委員長のご質問に対する回答ですが、整理がつくかどうかというお話ですが、実のところ昭和初期の現況図みたいなものはございます。ただこの時点ではですね、既に年月が経っているので、必ずしも人の手が入ってないとはちょっと言い難いかもしれませんが、そのあたりの現況との高さの取り合いのほうを一回整理いたしまして、精査のほうをさしていただきたいなというふうに思いますので、よろしくをお願いします。

事務局 先程の頬杖の話ですが、頬杖はいらないと思います。恐らく、頬杖が書いてあるのは、幕末の絵なのでもう大分壊れ始めて、使われた可能性、これも可能性ですけども、そういう解釈もできるかなと思いました。

委員長 質問ではないですが、皆さんの理解の為にと思ひまして。例えば6ページで、数値の書いた表があります。ここにいろいろな類例といいますか、類似の城郭の櫓等の部材間寸法とか、部材の寸法、それは平面的にとか、高さ方向とかいろいろ数値で検討されていますけど、あんまりこう横長になり過ぎるとか、縦長になり過ぎるとかということがなく、お城のこういう建物というのは、こういうプロポーションだっていうのが、大きく全国的に見て違ってないんで、刈谷城の場合、いろいろ分からない寸法については、石垣等から分かっている寸法がまずあって、そして分からない寸法は、他の例との比例関係で導き出そうとしている。これによって、城郭らしい姿で復元ができるという検討の数値の一覧表になっています。

そして11ページの、ここにあがっている主要寸法の根拠というのと同じですね。屋根の軒を支える材料として垂木というのがありますが、垂木と垂木の間隔とか、1.5をいくつに割っているとか、そういうことを検討して、刈谷城の場合だと、その割りつけがどういうふうになっているのか、間隔がいいかどうかというようなことを検討しているわけ

です。それで、寸法で出していくと16ページのような姿になって、しかも絵図からすると多門櫓が隅櫓の軒の下に取りつくような形で描かれているので、下の左の立面図のように、ここの軒の下に多門櫓がおさまるといような復元です。ただ、この平面からすると、他のお城に比べてちょっと高さが高くなってくる影はあるのですが、三階というふうに書かれている以上、この内部を三階にするとしたら、やはり、各階がそんなに低くもないだろうからということで、プロポーションとしては縦長になっているのですが、こういう断面の復元になりました。その比較で、17ページがあるのですが、名古屋城の場合は、櫓といえども、あまりにも規模が大きいものですから、やはり横長で、非常にプロポーションがいいのですが、その隣の弘前城あたりになると、もっと縦長になってくる。この場合は外観も三重ですから、刈谷城の場合は外観が二重で、内部は三階という形にすると、ああいう縦長のプロポーションにならざるを得ない。そんなふうに作成したと思います。ちょっと、補足の説明をさしていただきました。

いかがでしょうか。そのほかにはどうでしょうか。

委員 はっきりしたことは、推測でも結構ですが、絵図から見られてですね、辰巳櫓が二層三階だというのはあまり意識無くて初めて知ったような状況なのですが、以前あったと思われる乾とか月見櫓のほうもどうなのでしょう。将来的なことを含めても、絵図から見ても、やはり二層三階の作りなのでしょう。乾櫓のほうもそれより低いってことはないような気がするのですが、いかがでしょうか。やはり一番高い建物だったのか、乾の次ぐらいだったのか、どうなのでしょう。

事務局 細かい検討はやっていないので、すいません。私の憶測にはなってしまうかもしれませんが、実は北西隅櫓については中根家の城絵図というふうにいわれるもの、本多家の時代だったときの家老だった方の子孫の方が所蔵されている城絵図なんですけども、こちらのほうにはですね、分かりづらいのですが、十朋亭がある場所の隅櫓にしっかりと一重と二重の寸法の記載がなされています。その中で、例えば下の層で、四間五間、上であれば三間四方というような記載がございますが、その内部が何階だったかというところまでは、すいません、現状ではちょっとわかっていません。南東隅櫓については城絵図のほうには記載がないので、

発掘調査結果から石垣の法勾配等を検証した結果、三間三間という大きさもしっかり判明してきたので、有力ではないのかなというふうに考えております。以上でございます。

委員 細かくて大変申し訳ないのですが、22ページの土塀の図です。矢狭間とか鉄砲狭間の配置の間隔は、今回、何か使用されているのでしょうか。

事務局 いろいろなパターンがあるのですが、ここでは約一間ごとに狭間を入れている形としています。

委員 それで4ページですが、年代が違おうと思うのですが、③の三浦家よりの修復願の後ろのほうに、「塀江矢窓四拾ヶ所」と書いてありますが、これは3ページのb. 刈谷城図のちょうどこの部分を修復されているときの願いですね。将来的に土塀は、今回はこのあたりを多分再現されると思うのですが、将来もしかしたらここまで全部やるとすれば、このピッチだけはきちっと決められといたほうが、後々、格好いいのかなという気はします。それで、この三浦家からの修復願の通りいけば、大体この辰巳櫓が壊れたあたりの位置の塀の長さで、40箇所という矢窓の数というのがピッチを表すと思うのですね、大体、推定で。なので、一度ちょっとご確認をお願いします。

事務局 ありがとうございます。これも同じように比較検討して出してみたいと思います。

副委員長 門の案で、遺構に対して櫓門といいながら、ほとんど礎石が外へ出たような門の復元案を今回作ろうとしているわけですが、遺構の解釈もそうなのですが、それ以外の建物、多門櫓だとかは、本来の、この時期の城郭の建築としての常識を踏まえてこう作っているのですが、門だけは、異例と言いますか、本来あり得ないような形の復元案になっているのですね。そういう門を建てる必然性と言いますか、遺構の解釈はそうなのですが、その門だけどうしてこういう形に、とらざるを得なかったのか、その辺の理論的な補強と言いますか、あったほうがいいと思います。後でこの復元のほうを見学に来られて、どうしてこういう形になったのか、という質問は多分出ると思うので、その時に刈谷城は推定でいかざるを得ないと思いますが、こういう理由から、こんな形の門が作られることになったのではないかという説明をですね、やはり

できるようにしておいたほうが良いと思いますので、そのあたりのところを検討していただけたらなと思います。

事務局 そうですね。やはり刈谷城のひとつの特徴にはなるかもしれません。そういった面で、かなり目をひく部分ではありますので、先程の三間三間も、二重三階の隅櫓もそうなのですが、そのあたりについては、ご納得いただけるような理論と言いますか、そのあたりをですね、さらにまた今回の資料のみならずですね、今後煮詰めていきたいなと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

事務局 理論的なストーリーを作れということだと思いますが、類例としてはあるということがひとつと、恐らくこれを検討しないといけないんですが、櫓門の上のほうにどうやって上がるかという問題が出てくると思います。恐らく、このどこかに階段等のものがでてくる可能性も考えなきゃいけないのかなど。要は下との関係が非常にやりやすくなるというのはあるかもしれません。この櫓門の例で、下から階段がつくという例はこういう形ではないですが、あるものもありますので、そのあたりとの関係で下と上との関係っていうのは、もうちょっと検討してみたいと思っております。

委員長 今の話に関連して、発掘でどこまで確認できるかというのをもう一度確認したいのですが、このところに雨落溝ありまして、5ページにありますよね。この先、もっとこう雨落溝だと確認しようとしても、もうないのですか。この高さからいうと、あの礎石のとおり、地業の部分とこの感じでいくともうちょっと先にあってもいいのかなというような気がするのですが、これがもっといくのかどうか、それは確認できないのでしょうか。

事務局 色がついているところから、下側については現在の攪乱が大きく入っておりますので、そこからもう途切れてしまっていて確認できないです。その左側の④の礎石の抜き取り跡も、下側も、この右側から続いている攪乱が左側に伸びている状況で、先程、副委員長が、発掘で実際礎石が見つかっていないのか、深くまで掘ったけど見つからないのかということについては、7ページの鏡柱の礎石跡については、ちょっと微妙な位置なのですが、攪乱の所にかかっている可能性が高いと思われます。この攪乱がこのような形でずっと右から左に向かっていっていますの

で、このような状態でははっきりと検出できなかった。ただ、公園のスロープがすぐ近くにせまっております、比較的、遺構検出というのが容易ではなかったものですから、その中で、見落とすこともないかと思いますが、石がまとまっているような場所というのは、同一の検出面では見つかっていません。

委員長 分かりました。他にはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、愛知県文化財保護室の方から何かありましたらお願いいたします。

オブザーバー 色々と先生方のご意見等を聞かせていただいたのですが、やはりどういうふうに復元をしていくかというところで、発掘調査の成果、それから絵図の成果、いろいろあると思うので、そのあたりがきちんと説明ができるような形にしておくのが1番良いのかなと思っております。また、今回検討されたことも踏まえ、意見も踏まえ、特に門の周辺については、きちんと説明ができるような、もうこういう可能性は考えられないというところの話ができるような状態で先に進められたらいいかなと思います。

委員長 はい、ありがとうございます。それでは、宜しいでしょうか。

委員 資料2は説明されるのですか。これで終わりですか。

委員長 資料2は、図面一式として、そのうち主なものは資料1で精細されていますが、もし追加の説明がありましたらお願いします。

事務局 それでは、概約になりますけれども、資料2の説明をさせていただきます。1ページ目が石垣の間に入る表門、裏門の平面図になります。2ページ目が石垣の上に乗る櫓の平面図という形で、ここで柱の割りつけ等を見ていただきたいと思っておりますし、辰巳櫓の右手の多門櫓につきましては、これも長い多門櫓になりますので、その二間の中央に、柱を何本か立てております。こういったところにも見ていただければと思っております。それから面積ですが、そこに書いてありますように、多門櫓、辰巳櫓併せて総面積が515.65㎡、坪にしますと156.26坪という規模になります。3ページは、辰巳櫓の二階の平面と多門櫓の屋根伏せ、それから土塀の屋根伏せという形になります。4ページが、辰巳櫓の三階とその下の屋根伏せになります。5ページが、表門の平面図と二階の櫓の平面図です。右側の図が二階で、窓の位置は正面側が3箇所、この位置

に入りまして、背面側につきましては2箇所、この位置に入ることになります。6ページ目が梁間の断面図と桁行断面図、それから西立面図というのは、入り口、正面側になりますが、こちらの立面図という形になります。鏡柱に丸書いているのが、まあ釘隠しなのですけれども、こういった金物、それから足元にも金物をまいた絵にさせていただきます。7ページですけれども、これも同じように、裏門の平面図で柱の位置、これでスパン、それから柱の位置がお分かりになろうかと思えます。それから、点線で書いてあるところが、上にのる平面形を表してございます。右図が二階の平面形でして、柱の位置、それから窓の位置が確認できるかと思えます。8ページ目ですけれども、裏門の梁間断面図と桁行方向の断面図と西立面図になります。同じ展開ですけれども、西立面図については、石垣の間口が14.3尺という短い間口になりますので、その分だけ鏡柱の柱間が狭くなり、それからそれに応じて、袖柱の柱間までがまた短くなりますので、ここに括り戸を設けていますけれども、小さい括り戸になるということになります。ここの袖柱が絵図に描かれておりますので、ここに袖柱を設けているということになります。9ページですけれども、辰巳櫓の一階、二階、三階の平面図でございます。一階は側柱、側だけの柱ですけれども、二階のほうは、三階の平面を透減していますので、その柱が中に4本出ているという形になります。10ページが、西立面図、断面図、南立面図という形になっています。三階につきましては、天井高が8尺5寸で天井を張っています。中には天井を張っていないところもございしますが、ここは天井を張った上で、最小限の高さという形で腕木がすぐ直上にきている高さで設定しています。11ページが多門櫓の梁間の断面図になります。基本的に二間の梁間ですが、部分的には一間半、一間ちょっとの梁間になりますが、基本的な構造はこのパターンとなります。その横が立面図、部分的でありますけれども、横長の開口が入りまして、ここに、窓に格子戸が出てくるという形になりまして、この部分が塗込ない木の部分になります。それから、軒先の垂木も四角く塗込めているという形の図面にさせていただきます。12ページですけれども、これは土塀の立面と断面図です。この立面図が今10尺になっていますが、9.7尺になりますので修正をお願いします。13ページですが、辰巳櫓から東に伸びる多門櫓の立面図の合成です。こういった

感じで辰巳櫓から多門櫓を連続していきます。それと、後ろに200分の1の石垣の模型を作っています。今後はそれに応じた、整備レベルの設定や周辺の修景などの作業が必要になってくると思っております。後ろの模型で高さ関係をご理解いただければと思います。

事務局 今の模型ですが、今後は、本日の建物の検討結果を基に、今の石垣の上に、辰巳櫓、多門櫓、門などをのせていくような形になりますので、また、ご期待いただきたいと思っております。

委員 すいません。当局に要望がありまして。

お堀をね、やっぱり少し、全部やると大変時間かかると思うので、整備計画の最後でお堀を少し整理するという話だったのですが、やはりお堀ってというのは宝庫でございまして、昨年、秋田の久保田城で、お堀を探索くらいやったら、なんかいろいろなものが出てきたと。恐らく、あの下というのは、捨てるのにちょうどいいゴミ捨て場みたいなものなので、石とか瓦のかけらとかいろいろなものが出てきそうな気がするのですが、本格的にやるとすごくかかるので、例えば3mと5mくらいですね、少しヘドロとってですね、本当にあるかないか、全体の中で少し予算枠がなんかがあれば、早めに調べていただくと、なにか出てくるような気がするので、検討してほしいという要望です。よろしく願いいたします。

事務局 周辺の整備については今後の計画になってまいりますので、その中でも何らかの形で、触れていくことになるかと思っておりますので、その中で確認できるものは確認していきたいと思っております。

委員長 よろしいでしょうか。それでは、これで終わりたいと思っておりますが、第3回は3月24日に予定されていますが、その件について事務局から何かありましたらお願いします。

事務局 次回の開催については、3月24日木曜日午後2時から、同じ場所での開催を予定しております。委員の皆様には後日郵送にて案内を出させていただきますのでよろしくお願いいたします。また、本日の資料につきましては、まだ検討段階でございますので、お取り扱いには十分ご注意をお願いいたします。

傍聴の皆様におかれましては、大変お忙しい中、ご参加いただきまして、誠にありがとうございました。今回の委員会の開催につきましてご

意見等ございましたら、アンケート用紙にご記入いただきまして、お帰りの際、受付のほうにご提出をお願いいたします。また、お配りいたしました資料につきましては、受付のほうまでお返しいただきますようお願いいたします。

最後になりますが、委員の皆様におかれましては、本日も貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。今後も引き続きご意見、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

委員長　それでは、これで委員会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

以上